



Data

監督: 瀬々敬久
 脚本: 小川智子
 原作: 椰月美智子『明日の食卓』(角川文庫/KADOKAWA 刊)
 出演: 菅野美穂/高畑充希/尾野真千子/柴咲楓雅/外川燦/阿久津慶人/和田聰宏/大東駿介/山口紗弥加/山田真步/水崎綾女/藤原季節/真行寺君枝/大島優子/渡辺真起子/菅田俊/烏丸せつこ/宇野祥平

👁️👁️ みどころ

同じ名前の10歳の息子を持った3人の母親たち。菅野美穂、高畑充希、尾野真千子の3人が椰月美智子の原作と瀬々敬久監督の演出下、如何なる母子のドラマを？

冒頭の“揉み合い”は一体ナニ？それがわかる終盤までに展開される3つの物語はそれぞれ興味深いが、いずれの家庭も崩壊に向かって一直線！そう思っていると、事態は意外にも…？

一見ハッピーエンド(?)の本作ラストは、明日への希望？それとも、単なる梅雨の晴れ間？あなたはどうか考える？



■□■瀬々敬久監督が椰月美智子の原作で母と子のドラマに！■□■

瀬々敬久監督は2010年の『ヘヴンズ ストーリー』(10年)、『シネマ25』187頁)で第61回ベルリン国際映画祭で国際批評家連盟賞等を受賞した後、『64—ロクヨン—前編』(16年)、『シネマ38』10頁)、『64—ロクヨン—後編』(16年)、『シネマ38』17頁)を代表作とし、近時は『菊とギロチン』(18年)、『シネマ42』158頁)、『友罪』(18年)、『シネマ42』165頁)、『楽園』(19年)、『シネマ46』145頁)等々の問題作を次々と発表している、今が旬の監督。そんな瀬々監督が椰月美智子の原作『明日の食卓』(16年)(角川文庫/KADOKAWA 刊)を元に、母と子のドラマに挑戦！

原作は、自分の子育て体験の中から小学3年生の石橋優とその母親の物語を生み出した1970年生まれの女流作家・椰月美智子の『明日の食卓』。本作が面白いのは、石橋ユウという10歳の同じ名前を持つ3人の母親たちを比較・対照させながら描いたことだ。それを繋ぐのは今はやりのSNSだが、3つの家庭の3つの物語は如何に？そこから見えてく

るさまざまな人間の本性は？

■□■ 3人の女優は？尾野真千子は別の監督で別の母親役を！ ■□■

本作で描かれる、3人の石橋ユウと3人の母親たちは次のとおりだ。

①神奈川在住、43歳のフリーライター・石橋留美子（菅野美穂）。夫・豊（和田聰宏）はフリーカメラマン。息子・悠宇（外川燦）10歳。

②大阪在住、30歳のシングルマザー・石橋加奈（高畑充希）。離婚してアルバイトを掛け持ちする毎日。息子・勇（阿久津慶人）10歳。

③静岡在住、36歳の専業主婦・石橋あすみ（尾野真千子）。夫・太一（大東駿介）は東京に通い勤務するサラリーマン。息子・優（柴崎楓雅）10歳。

ちなみに、尾野真千子は石井裕也監督の『茜色に焼かれる』（21年）で、何とも風変わりな母親役（？）を演じたばかり。同作では、夫が理不尽な交通事故で死亡した後、賠償金を拒否し、1人で息子を守りながらフーズク嬢をも物ともせず生きるたくましい母親役（？）だったが、本作はそれとは正反対の母親役だ。静岡の実家に建てているマイホームは立派だし、毎日新幹線で東京に通う夫を車で駅まで送迎するのも楽しそう。しかも、息子はいい子で優等生だから、あすみの家庭は『茜色に焼かれる』とは違って、順風満帆。そう思ったが・・・。

『茜色に焼かれる』での尾野真千子のような母親・加奈役を本作で演じるのは高畑充希。コンビニとクリーニング店の掛け持ち仕事は大変だが、借金の返済も済ませた、というからエライ。大阪弁のうまさにもビックリ。そんな母親の頑張りを毎日見ていけば、子は順調に育つはずだが・・・。

3人の母親の中で最初から不安いっぱいなのは留美子。2人の男の子の兄弟喧嘩は相当なものであるうえ、フリーカメラマンの夫は浮気の疑いをはじめ、かなりヤバそうだ。留美子は戦場のような子育ての日々を、ブログ「鬼ハハ&アホ男児Diary」に綴っていたが、そのフォロワー数は？ひょっとして、その出版は？留美子はある日、それを先輩の編集者・成田依子（渡辺真起子）に相談したが・・・。

■□■ 留美子の家庭は崩壊！加奈の家庭も崩壊！なるほど！ ■□■

本作中盤は、母親の奮闘にもかかわらず、3つの石橋家がいかにも崩壊していくかが描かれる。私は留美子役を演じる菅野美穂については、NHKで放送された特別番組『坂の上の雲』（09年～11年）での“凛とした演技”が強く印象に残っているが、本作では“絶叫型の演技”が目立つ。しかし、職を失い父親になり切れないような夫と毎日接していたら、それもやむなし？他方、私も男2人兄弟の弟だったが、スクリーン上の兄弟喧嘩を見ると、少し不自然な点も・・・？留美子の家庭の問題は、亭主の出来の悪さが大きなウエイトを占めていることは明らかだから、離婚さえすればかなりの問題は解決するのでは？

本作では留美子、あすみに比べて加奈の頑張りが目立っている。“大阪のおばちゃん”の典型のような母親・石橋よしえ（烏丸せつこ）もたくましいが、娘の加奈もそれを受け

継いだようで、母親以上にたくましい。脚本では（原作では？）そんな加奈を痛めつけるため（？）、クリーニング店のリストラ、弟・石橋正樹（藤原季節）の登場による金の無心や通帳窃盗などの物語を登場させていく。それによって、固い絆で結ばれていた加奈と勇の絆が壊れていく様を描こうとしているが、私の感想ではそれには少し無理がある。私にも幼い頃、母親に気を遣う中で、「あれも言えない」、「これも言えない」という気持ちが鬱積していたが、勇から「オカンはほんまはぼくのことも嫌いなんや！」と言われてしまうと・・・。

■□■あすみの場合は？あすみの家庭の崩壊は凄惨！■□■

留美子、加奈の家庭の崩壊も大変だが、それと比べてもあすみの家庭の崩壊は凄惨だ。あすみは、①夫は真面目なサラリーマン、②我が子・優はいい子で優秀、③隣に住む姑・石橋雪絵（真行寺君枝）とは程よい距離で、いい関係。そう信じていたが、実は・・・？

私が小学生の時代にもいじめはあったが、それは今のような陰湿なものではなかった。また、男同士やグループ同士での喧嘩もあったが、それも今のような陰湿なものではなく、大人に成長するための酸いも甘いも噛み分けるステップのような感じがあった。ところが、あすみの息子・優を見ていると？私が小学生の頃は“サイコパス”などという洒落た言葉はなかったが、ある日、豹変した優の表情とそのセリフを見ていると、これぞ、まさに“サイコパス”。さらに、登場するたびに毎回どことなく不気味な雰囲気を漂わせていた雪絵を、優が「汚い」と言いながら踏みつけている姿を見ると・・・？「スープの冷めない距離」というのは何ともいい言葉だが、石橋あすみ家におけるその実態は？

■□■冒頭の揉み合いは？その結末は？犯人は？■□■

本作は冒頭に暗いスクリーン上で2人が揉み合うシークエンスが登場した後に、3人の母親の物語が紹介されていく。ある新聞紙評は、「ユウという名前の息子が母親の手にかかって命を落とす不明瞭な映像が冒頭で示されてから、3つの家庭の物語が始まる」と解説されているが、残念ながら私にはそのシークエンスがそういう意味だと分からず、まさに“不明瞭な映像”だった。これは一体ナニ？

他方、本作には3人のメインの女優の他、烏丸せつこや真行寺君枝等の“かつての名女優”が登場する。さらに驚くべきは、私は全然わからなかったが、本作には『紙の月』（14年）（『シネマ35』108頁）等で有名な大島優子も登場している上、①あすみの息子・優の同級生・レオン君の母親・竹内かおり役の水崎綾女、②あすみの友人・菜々役の山口紗弥加、③加奈と対立するデリヘル嬢で息子・勇の同級生の母親・西山明奈役の山田真歩、等の、出番は少ないながら重要な役割を果たす女優が多数出演しているので、それにも注目！

しかして、本作の3つのストーリーがそれぞれ悲劇的な結末を迎える中で登場するのが、殺人犯・耀子（大島優子）と留美子との面会シーンだ。殺人犯との面会シーンには、キム・ギドク監督の『プレス』（07年）（『シネマ19』61頁）をはじめとするさまざまな名作

があるが、本作の面会シーンでは一体何が語られるの？パンフレットの「Director Interview」の中で、瀬々監督は「劇中で大島さんの演じる「耀子」と直接顔を合わせるのには留美子ですが、留美子を演じた菅野美穂さんと大島さんには、どことなく似た雰囲気も感じられる。ガラス越しに対面するシーンで、ガラスに写った2人の顔が重なっていくと、お互いが自分の分身と向き合っているようにも見えませんか？」と語っているが、さて、あなたはこれで納得できる？

■□■女たちの再生は？ハッピーエンドは如何なもの？■□■

なぜか近時の邦画には、有望監督が、女や母親たちの生き方に焦点を当てた名作が集中している。そんな視点で私が注目したのが、石井裕也監督の『茜色に焼かれる』（21年）（『シネマ48』148頁）、内田伸輝監督の『女たち』（21年）、瀬々敬久監督の本作『明日の食卓』の3本だ。2021年5月17日付日経新聞では、編集委員の古賀重樹氏が「日本の映画が描き始めたコロナ禍の社会」、「逆境の中に芽生える希望」というテーマで両作を比較検討していた。そこでは、『女たち』については、「分断の中に生まれる和解への糸口を示した」と、『茜色に焼かれる』については、「追い詰められたシングルマザーが必死に生きる姿を描く」と解説されていた。

しかして、本作は菅野美穂、高畑充希、尾野真千子の三者三様の母親たちの苦闘の様が描かれるが、さあ、そのそれぞれの結末は？

私はそれに注目していたが、瀬々監督の収束の仕方は、意外や意外、ハッピーエンド(?)に向かっていくので、アレレ？それはちょっと違うのでは？もっともこんな収束の仕方をみれば、本作を『明日の食卓』とタイトルした意味も分かってくるが、それでもやっぱり、本作でこんな収束の仕方はないのでは？ちなみに、本作のチラシには、「どこにでもいる、私たちと同じ、普通の人でした。」という大文字に続いて、「石橋ユウ、10歳。同じ名前の息子を持つ3人の母親たち。住む場所も環境も違う彼女たちは、それぞれが子育てに奮闘しながらも、息子を心から愛する幸せな家庭を築いていたはずだった。だがある日、ひとりの「ユウ」君が母親に殺された——どこで歯車が狂ってしまったのか。なぜこのような事件を起こしてしまったのか、そして「ユウ」の命を奪った母親は誰なのか……。三つの石橋家がたどり着く運命は、あなたの運命そのものかもしれません。」と問題提起されている。これを読むと、本作は殺人事件を巡るミステリー映画なの？一瞬そう思ってしまう。

ところが、チラシには他方で、「我々に共感と問題意識を喚起しながら、ラストには希望の光を与えてくれる第一級のエンタテインメントが誕生した。」とも書かれている。これは一体どう理解すればいいの？さらに、別の新聞紙評では「3人が、それぞれ顔をあげる終盤は印象的だが、その視線の先にあるのは果たして明日への希望か、単なる梅雨の晴れ間か。」と書かれていたが、この筆者はどう理解しているの？鑑賞後、私の頭の中の混乱は、深まるばかりだったが……。

2021年（令和3年）6月9日記